

山崎 佐旧蔵「紀州華岡家瘍科図鑑」の 書誌学的研究

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成31年4月19日／受理：令和2年1月31日

要旨：医史学研究者・山崎 佐旧蔵の「紀州華岡家瘍科図鑑」は、華岡流の外科手術の図譜であり、1809年に成った赤石希范の「乳岩図譜」の系統に属する。これは赤石希范と崖 剛先の序(跋)が収められていることで明らかである。本図鑑は山崎によって1810年に成立したとされてきたが、図鑑中の一図の解析によって1825年夏以降に完成したことが判明した。図鑑は模写されて1956年にシカゴのInternational Museum of Surgical ScienceのHall of Fame(現在はJapan Hall of Fame)に寄贈・展示され、北米における華岡青洲の業績の普及に貢献している。模写本がJapan Hall of Fameに展示されるに至った経緯についても言及した。

キーワード：山崎 佐, 華岡流外科, 瘍科図鑑, 赤石希范, Japan Hall of Fame

はじめに

華岡流外科の最大の特徴は、華岡青洲(以下「青洲」)によって開発された全身麻酔薬「麻沸散(湯)」を投与して乳癌手術(「乳房切断術」ではなくして「乳癌腫瘍摘出術」)を始めとする各種の手術を行ったことである¹⁾。わが国において青洲に先行する外科の各流派では選択的手術が組織的かつ系統的に行われることはなかった。患者が手術時の疼痛に耐えることが出来なかったからである。そして、華岡流外科のもう一つの特徴はかれらが単に手術を行っただけでなく手術に関連した多数の図を遺したことであろう。これほどの手術図が華岡流以外の外科の諸流で遺された例を見ない。このことは青洲以降も門人の本間玄調の「続瘍科秘録」²⁾、鎌田玄台の「外科起癩図譜」³⁾が作られたことによって容易に首肯されるであろう。

手術図の存在によって外科的疾患が実際に術前どのような状態であったのか、切除された腫瘍塊がどのようなものであったか、そして、術後どのように治癒したのかが具体的に理解できる。図は

門人の教育にも有用であった。このことは青洲自身、最初の乳癌手術患者である藍屋 勘の症例報告である「乳巖治験録」の末尾において「之を同志に示すため図を作り之を識すといわんのみ。」⁴⁾と記したことによって理解される。ここでの「同志」には門人の意も含まれている。このように藍屋 勘の乳癌手術では図が描かれているが、もちろん青洲の命によって図が作られたものである。これが春林軒における最も古い手術図であると考えられ⁵⁾、引き続いて行われた乳癌手術においても同様に図が作られた。乳癌手術症例が20数例に達した1809年5月に門人赤石希范はそれまでの乳癌手術の図をまとめて一冊の図譜を作ろうと計画した。しかし、この計画に対して青洲が積極的賛意を示さなかったために赤石の努力は水泡に帰した⁶⁾。青洲は手術に際して記録として図を描いてそれらを遺しておくことに反対したのではなくして、それを出版することに賛意を示さなかったと考えられる。

以来、春林軒では乳癌手術のみならず、その他の疾患の手術に際しても図が描かれた。それらは

春林軒に蓄積されて門人であればだれでも閲覧することが出来たばかりでなく、模写することも可能であったことは、現今遺されている夥しい図譜類によって窺い知ることが出来る。図譜には乳癌手術ばかりではなく、各種の奇形を含む稀な疾患の図も含まれていたため、いつの頃からか「奇患図」と呼ばれるようになった。現在多くの図譜、いわゆる奇患図が知られているが、それらのすべてが春林軒で蓄積保管されていた手術原図を見て模写されたのではなくして、原図を臨模して作られた図譜がさらに転写されて多くの図譜が作られたと考えられる。転写に際して図の取捨選択がなされ、さらに新しい図が追加されて様々な図譜が誕生した。これはあたかも青洲の口述を筆録した記録が次々と書写されて多数の写本ができたと同じ状況であり、写本に「同名異書」、「異名同書」が誕生したと同様に、奇患図譜においても「同名異図譜」、「異名同図譜」の状態が出現したといっても過言ではない。とくに図譜に関しては殆んどが「異名異図譜」と表現してよいほどの状況にある。

それらの図譜の一冊が本稿で論ずる医史学研究者であった山崎 佐（やまざき・たすく）旧蔵の「紀州華岡家瘍科図鑑」（以下「瘍科図鑑」）である。山崎は弁護士で「日本疫史及防疫史」⁷⁾の著者でもある。本図鑑をここで取り上げる理由は、この図鑑は模写されてシカゴの International College of Surgeons（以下「ICS」）の一部門 International Museum of Surgical Science（以下「IMSS」、改正された名称）の Japan Hall of Fame（以下「JHF」、以前は Hall of Fame⁸⁾）に常時展示されて、アメリカにおける青洲の業績の普及に大きな役目を果たしているからである。しかし、この図譜がどのような内容の図鑑であるか、だれが模写したのかなど詳細は一般には知られていない。さらにこの山崎旧蔵の原本の図鑑に関してもこれまで全く研究されていなかった。今回、著者はこの原図鑑に関連して従来知られていなかった諸点を明らかにしたので報告する。

1. いわゆる奇患図に関する先行研究

本論に入る前に華岡流の図譜類に関してこれまでにどのような研究が行われてきたかについて簡単に触れてみたい。

1923年に呉 秀三が大著「華岡青洲先生及其外科」⁹⁾を発表して青洲に関する本格的の研究が始まった。呉はその中の第三巻「青洲先生ノ著述」の第二「青洲先生治験ノ図巻」において、「華岡家治験図巻第一～第三」、「華岡家整骨并巻毛綿図巻」（呉が図巻の4番目に示しているため、以下「華岡家治験図巻第四」とする）と「華岡氏治術図識」などを紹介し、それらの中に描かれた図について簡潔に記述している¹⁰⁾。これが華岡流の図譜類に関する最も古い研究であった。極めて少数の図だけは本文中に示されているものの、ほとんどの図は省略されている。しかし、呉によって華岡流の図譜類、いわゆる奇患図の存在とそれらの概要が知られるようになったことは青洲研究において大きな進歩であった。

1933年、呉に次いで青洲に関して精しい研究を行った関場不二彦は「西医学東漸史話」の中で図譜類に言及しているが、上述した「華岡家治験図巻第一」、「華岡氏治術図識」に加えて赤石希范の「乳岩図譜」に簡単に言及したに過ぎないし、図も示されていない¹¹⁾。さらに同じ年に南紀徳川史刊行会の編者堀内 信は、「南紀徳川史卷之百六十一」の「学制第三 文学 三家塾」に「華岡家治験図巻第一」全86図中61図を収載し簡単な解説を加えた。原図巻は彩色であるが、収載したのは白黒の図であり、原図巻中の男性器、女性器疾患の図は除外されている¹²⁾。これによって「華岡家治験図巻第一」の具体的全貌が知られるようになった。しかし、以後の青洲研究者で「華岡家治験図巻第一」の図の過半が「南紀徳川史」に収載されていることに言及した研究者は一人もいない。いわば忘れられた存在であった。1964年に「医聖 華岡青洲先生顕彰会」の森慶三らは「医聖 華岡青洲」を編集したが¹³⁾、呉の著の現代日本語訳版と言ってもよい。もちろん二、三の新知見は付加されているが、基本的に

はほぼ同じ内容である。したがって奇患図についても何ら新しい見解が示されていない。以後50年間、青洲に関しては多くの論考が発表されたが、奇患図に関しては基本的、系統的な研究は全くなされてこなかった。ただし、この間、各施設からそれぞれ所蔵する奇患図を紹介する簡単な記事が発表されてきたことを無視するものではない。

著者は2004年に「廣瀬屋利兵衛の妻の乳癌手術」¹⁴⁾と題する一章を拙著中に掲載し、家蔵していた野村 鄂の稿本と思われる「青洲先生療乳癌図記」をカラー写真で覆刻し、併せてそれまで行ってきた野村 鄂の埜域の調査の結果を述べた。「青洲先生療乳癌図記」には赤石の「乳岩図譜」とほぼ同様な図が収められている。これによって野村の系譜が明らかになり、この図譜の成立の経緯も明らかになった。

2013年に著者は奇患図に対する初めての本格的な研究を行って、その結果を拙著「華岡青洲研究の新展開」中に「奇患図の研究」と題する一章としてまとめた¹⁵⁾。この研究はアメリカ麻酔科医学会(American Society of Anesthesiologists)傘下のWood Library-Museumが奇患図の一本(ニューヨーク州立大学解剖学教授で、日本の医学史にも詳しくあったGordon E. Mestler旧蔵の図鑑)を購入するに際して著者に鑑定を依頼してきたことを契機として行ったものであった。それまでに著者が実見し、あるいは全丁のカラーコピーを入手できた16本の図譜を対象にした研究であった。この研究によって現今見られる図譜は基本的に上述した「華岡家治験図巻第一」～「華岡家治験図巻第四」に分類されることが分かった。もちろんこれらの図巻の起源は「乳巖治験録」に描かれた図であり、これが赤石のまとめた図譜となり、さらにその後の図が追加されて「華岡家治験図巻第二」に発展した。流布している図譜、図鑑の多くもこの系統に属する。「華岡家治験図巻第一」は青洲の死後、1837年に画家端月が春林軒にあった図を模写して一巻としたものである。「華岡家治験図巻第一」は青洲展がある度に出品展示されるが、もちろん詳細な解説がなされたことはない^{16,17)}。

「華岡家治験図巻第三」は大坂の合水堂における華岡南洋の手術図を中心とするものであり、この系統の図譜は比較的少ない。「華岡家治験図巻第四」は骨折・脱臼の整復法の図である。2014年に長田 功はその家蔵する「乳癌奇病図」(内題は「乳巖奇病図」)をカラーで覆刻し注を付して刊行した¹⁸⁾。この写本は赤石の序、乳癌の図(13症例)、そして野村 鄂の記録を含んでいるので、赤石の「乳岩図譜」の系統に属するが、基本的には上述した「青洲先生療乳癌図記」を中心に模写したものであろう。画者は中嶋惟新であるが彼の略歴は不詳であり、書写年も天保5年(1834)か天保15年(1844)の何れかである。

以上が奇患図に関してのこれまでの研究のあらましである。

2. 「瘍科図鑑」の模写本が JHFに納められるに至った経緯

本論に入る前に本図鑑の模写本がシカゴのIMSSのJHFに納められる経緯について簡単に触れておくことが必要であろう。このことに関しては当事者であった日本外科学会の重鎮塩田廣重が次のように記している。

これより先、アメリカ合衆国シカゴ市における国際外科学会本部では、各国代表外科医を祀る名誉会館が設立せられ、この学会の日本部会々長たる私宛に前記会館日本室に祀らるべき人物の推薦依頼がありました。即座に私は青洲先生を除いて外にないと考え、その旨早速先方に伝えると共に、青洲先生の麻酔実験に身を挺せられた妻女や母堂の光景を画く日本絵(立石画伯作)を始め、先生の書軸および手術図鑑(山崎佐氏所蔵原図、阿部画伯模写)等を持参、日本室正面に展示しました。一九五四年のことですから丁度今から一昔前となります。¹⁹⁾

この塩田の記述によって、青洲の業績がIMSSのJHFで紹介展示される経緯が知られる。そして図鑑に関しては山崎 佐所蔵の図鑑が阿部画伯によって模写されたことが判明した。しかし、こ

の記述だけではなく山崎の所蔵する図鑑が選ばれ、阿部画伯が誰であるかは知られない。この疑問は山崎旧蔵の図鑑の裏表紙に記された山崎の識語によって氷解する。以下に山崎の識語を記す。

友人医学博士菊地真一郎君昭和三十一年九月アメリカの外科学会に赴くにあたり、エーテル麻酔より七十年前わか紀州の華岡青洲先生が全身麻酔により手術した事、この手術図鑑を手土産として持参したとの計画あり。仍て同君に之を貸与す。同君河合玉堂画伯の監修の下にこれを二冊模写し、一本は菊地博士の許に納め、一本はアメリカに持参すと謂ふ

山崎の識語には、例えば「七十年前」という誤りがあるが、ここでは問題にしない。重要なことは模写が川（「河」と誤記）合玉堂の監修の下に行われたとあることで、塩田の記述にある「阿部画伯」は川合玉堂門下の人物であることが分かった。「玉堂美術館」（東京都青梅市）の学芸員にお尋ねしたところ、1954-55年当時、川合玉堂の門人で「阿部画伯」を称する人物は新潟県出身の阿部六陽（新一郎、1906-1987）以外にいないことが分かり、塩田のいう「阿部画伯」は阿部六陽であることが分かった。阿部が玉堂の内弟子になったのは1925であったから、画業30年のベテランの日本画家であった²⁰⁾。

以上によってICSからJHFに展示する人物の推薦を依頼された塩田は、展示する人物は華岡青洲以外にはないと考え、展示物の一つとして青洲の手術図を考え、これについて同僚菊地真一郎博士に相談し、菊地は友人山崎 佐から図鑑を借覧して川合玉堂門下の阿部六陽画伯に依頼して模写本2本を作り、その内の一本をJHFに寄贈したことが判明した。菊地が1956年に学会出席の際にこの図鑑をJHFに持参し納めた。なお、この原図鑑は1963年「麻酔展」が大阪心斎橋の大丸百貨店で開催された際に陳列され、山崎は写本がJHFに寄贈されるに至った経緯を簡単に記した序文（1955年に記された）を付した²¹⁾。しかし、山崎の序文の冒頭「余曾つて熊本市において、紀州華

岡家瘍科図鑑（文化七年西紀一八一〇画く）一卷を入手し、……」とあるが、この年紀は図鑑中の野村 鄂の文章（詳細は後述）の末尾に「文化七庚午夏六月七日 塾生 備後 野村 鄂記」（51丁表）とあるのに準拠したものである。この日付は野村がこの記録を書いた日であって、この図鑑が模写された年月日ではない。なお塩田が1955年10月30日にJHFに提出した図鑑の説明書（写真1）には図鑑の成立年を「1809」年としているが、これは図鑑中の赤石の序の年紀に基づいたものである。山崎の主張する1810年も塩田の主張する1809年も共に誤りである。さらに山崎の蔵書が順天堂大学に寄贈され、その際作られた「山崎文庫目録」には本図鑑の成立年を「文政6年（1823）」としている²²⁾。何を根拠に1823年と記述したのかは不明であり、この1823年も誤りである。また「赤石希沱識」と赤石の識語のみが記されているかのように記述しているのも誤りである。この図鑑を含む展示資料がJHFに寄贈された経緯については中山恒明と菊地真一郎が詳細に述べているので参照されたい²³⁾。

3. 「瘍科図鑑」の書誌とその内容

山崎旧蔵の「瘍科図鑑」は、現在順天堂大学の日本医学教育歴史館に所蔵されている。請求番号は「山崎文庫 9158」である。大きさは31.3×21.2cmで、四ツ目袋綴じ。図1に表紙を示した。表紙右上には山崎の菱形の蔵書票が貼付されている。題箋は茶褐色の紙片二枚に「紀州華岡家」と「瘍科図鑑」と墨書されて貼付されている。山崎が熊本でこの図鑑を購入した時点（昭和17年5月3日、巻末の識語による）ですでに貼付されていたのか、あるいは後に山崎によって貼り付けられたのか不明である。裏表紙の山崎によると思われる書き入れによれば、この図鑑は「熊本医官鳥飼家旧蔵」とある。全51丁であるが、卷子本（縦26.5cm）であったものを51枚に裁断し、それぞれをより大きな和紙に張り付けて冊子本に仕立て直したものである。改装の時期は不明である。そのために図2に2丁裏と3丁表を示したように、各半丁の貼り付けた図の位置が異なってい

HANAOKA'S SURGICAL ATLAS

This atlas is a copy of Hanaoka's Surgical Atlas, Kishu, Japan, written in the Sixth Year of Bunka (1809). The original atlas is owned by Tasuku Yamazaki, M.D., L.L.D.

Dr. Seishu Hanaoka was born in the Tenth Year of Horeki (1760) in Kiinokuni, Japan, and died in the Sixth Year of Tempo (1835) at the age of seventy-six.

In the Western World, Aether Anaesthesia was used by the medical profession for the first time in 1846, and chloroform was used for the first time in 1847. In Japan, however, Mandrake (*Datura alba* Nees) was used as a general anaesthetic for breast cancer and other major surgery for the first time by Dr. Hanaoka in the Second Year of Bunka (1805). Thus, use of general anaesthesia in Japan preceded the Western World by about forty years. Disclosure of this fact to the medical world by means of Dr. Hanaoka's atlas represents a source of joy to the medical profession in Japan.

On the occasion of the Second Congress of the Japan Section of the International College of Surgeons, and with the agreement of the members thereof, we are presenting this copy to the Hall of Fame of the International College of Surgeons. It is our sincere hope that this presentation will have significant meaning to the entire medical profession throughout the world.

Tokyo, Japan
30th Year of Showa
October 30, 1955

Hiroshige Shiota, M.D., F.I.C.S. (Hon.)
President, Japanese Section,
International College of Surgeons

Compiled by
Shinichiro Kikuchi, M.D., F.I.C.S.

写真1 塩田広重がHall of Fameに提出した図鑑の説明書 (International Museum of Surgical Science 所蔵)

る。画は画家によって描かれたものと考えられ、春林軒の門人などの素人が描いたものではないが、画者は不詳である。

「瘍科図鑑」の各丁の図の内容を表1の左欄に示し、それらが呉の記述した図譜中のどの図に該当するかを右欄に示した。「瘍科図鑑」の図に説明文を欠くものには著者が患者の性別、疾患名、患部の左右別を()内に補った。これによれば「瘍科図鑑」の図の大部分は「華岡家治験図巻第一」、「華岡家治験図巻第二」と共通する。このこ

とは「瘍科図鑑」が必ずしも「華岡家治験図巻第一」、「華岡家治験図巻第二」に遅れて成立したことを意味するものではない。春林軒に蓄積保存されていた手術図の一部をある時期に模写したのが「華岡家治験図巻第一」であり、別の機会に異なった手術図を模写したのが「華岡家治験図巻第二」であると考えられる。「華岡家治験図巻第一」の場合、画者は端月で、模写したのは1837年(天保8)であることが分かっているが、「華岡家治験図巻第二」の場合、画者と模写年は不明である。



図1 「瘍科図鑑」表紙
(順天堂大学日本医学教育歴史館所蔵)

「瘍科図鑑」の場合、「華岡家治験図巻第一」と「華岡家治験図巻第二」からそれぞれ必要と考える画を選択して成ったものか、それともそれらとは別個に春林軒に蓄積保存されていた原図類を模写し

たのか、既に完成していた図譜を模写したものか容易に判断が付かない。後述するように、「瘍科図鑑」の成立は「華岡家治験図巻第一」より古く、したがって「華岡家治験図巻第二」の系統の図を核として、それに「華岡家治験図巻第一」に含まれる図を付加したものであろう。

奇患図の系統を考える上で一つの参考になるのが、一部の図が円の中に描かれていることである。図を円で囲んでいると表現すれば分かり易い。「瘍科図鑑」の場合、表1の左欄の丁数の後に○印を付したように合計22図が円の中に描かれた図である。円の中に図を描くようになった起源は知られるところがないが、北里大学東洋医学研究所所蔵の修琴堂文庫本の本（題名を欠く一著者注）では全93図の内、41図は円の中に描かれた図である²⁴⁾。この写本の完成年は不詳である。現在のところ、円の中に描かれた図があり、年紀が確認できる最も古い図譜は東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「華岡家奇患図」である²⁵⁾。1829年（文政12）に確 齋清（「かく・さいせい」か、正確な読み不詳）によって模写されたこの図譜は前年に大坂の合水堂で守矢子行²⁶⁾が書写した図譜であった。この中で32丁表から37丁裏ま



図2 同1丁裏と2丁表の図（順天堂大学日本医学教育歴史館所蔵）

表1 「瘍科図鑑」と他図鑑との比較

「瘍科図鑑」の説明文の()は松木による注

「瘍科図鑑」の説明文	他図譜における類似図
1丁表 江都之人(男, 左頬部の腫瘍)	「華岡家治験図鑑第一」の(1)
1丁裏 浪華島之内妓 肉瘤(女, 右頬部)	「華岡家治験図鑑第一」の(2)
2丁表 田邊中町女十九歳 肉瘤(左頬部)	「華岡家治験図鑑第一」の(5) 〔紀州田邊中街堀太郎兵衛女年十七〕
2丁裏 肉瘤 塊量三十三錢(女, 左頬)	「華岡家治験図鑑第一」の(6) 〔豫州宇和島人核量三十三錢〕
3丁表 肉瘤 泉州堺沈香屋主人(男, 左頬部)	「華岡家治験図鑑第一」の(3) 〔泉州左海沈香屋八郎平衛子年十九 左頬〕
3丁裏 血瘤 勢州山田之人(男, 前額鼻部)	「華岡家治験図鑑第一」の(4) 〔血瘤 勢州山田某〕
4丁表 肉瘤 有田之農夫(男, 左鎖骨下)	「華岡家治験図鑑第一」の(9) 〔紀州在田部〕
4丁裏 血瘤 紀州日高之人 若山清高之兒也(男, 左臍傍)	「華岡家治験図鑑第一」の(12) 〔血瘤 紀州日高〕
5丁表 血瘤(男, 右大腿内側部)	「華岡家治験図鑑第一」の(16) 〔臍は右大腿内側と注〕
5丁裏 粉瘤 湯浅伊兵衛(男, 前頸部)	「華岡家治験図鑑第一」の(7) 〔粉瘤手術図 青洲翁下、刀面粉瘤之脱、塊也。紀州湯浅伊兵衛〕
6丁表 血痣翻花 江戸小間屋忠兵衛妻(右背腰部)	「華岡家治験図鑑第一」の(14) 〔血痣翻花瘡 東都小間屋忠兵衛女〕
6丁裏 其二 全形(摘出標本)	「華岡家治験図鑑第一」の(15)
7丁表 火傷 高野山之僧(男, 左膝窩部)	「華岡家治験図鑑第一」の(10) 〔火傷 野峯之僧足委中放平〕
7丁裏 火傷 日高之人(男, 左上腕と胸壁の癒着)(正面図)	「華岡家治験図鑑第一」の(11) 〔火傷 紀州日高 手脇下付〕
8丁表 其二 截断(左側面図)	「華岡家治験図鑑第一」の(11)
8丁裏 患耳瘤 和州市 某之小兒(右耳)	「春林軒奇患図上」7丁裏* 〔和州市某小兒 耳瘤〕
9丁表 虫胞 頭皮肉間生於白虫(男)	「華岡家治験図鑑第一」の(17) 〔蟲胞 頭皮肉間生於白蟲。紀州根来西坂本清吉男〕
9丁裏 肩風 備前之人(男, 左肩甲部)	「華岡家治験図鑑第一」の(8) 〔肩風 備前岡山〕
10丁表○走馬疔 荒川之子(男, 唇周辺部)	「華岡家治験図鑑第一」の(20) 〔走馬疔 紀州阿良河郷源兵衛音男〕
10丁裏○肉瘤 勢州朝熊永正寺(男, 左頬部)	「華岡家治験図鑑第一」の(21) 〔肉嬰 勢州朝熊永正寺僧〕
11丁表○口痔 若州小浜之人(男, 左口腔)	「華岡家治験図鑑第一」の(23) 〔口痔 若州小浜〕
11丁裏○(口唇の異常)(男)	「華岡家治験図鑑第一」の(22) 〔缺唇 紀州那賀粉河村大工〕
12丁表○血痣 大和高市郡樹馬又七行年二十七(男, 下口唇)	「華岡家治験図鑑第一」の(27) 〔血痣翻花 和州高市郡樹馬村又七年二十七〕
12丁裏○舌疔 若山之老婦(女, 下口唇)	「華岡家治験図鑑第一」の(24) 〔舌疔 本国和歌山廣瀬通老母〕
13丁表○骨瘤 京都東洞院呉服屋新兵衛行年二十二(男, 左下顎部)	「華岡家治験図鑑第一」の(40) 〔京都某異痣宜露風狀〕
13丁裏○其二(患部の切開図)	説明文なし。〔男, 下顎腫瘍〕と呉は解説
14丁表○眼胞菌毒 備後尾道之人(男, 左眼)	「華岡家治験図鑑第一」の(26) 〔菌毒 備後尾道〕
14丁裏○同前 阿州徳府(男, 左下眼瞼)	「華岡家治験図鑑第一」の(25) 〔菌毒 河州徳府〕
15丁表○骨瘤 常州水戸樹内某行年十六(男, 左頬部)	「華岡家治験図鑑第一」の(19) 〔常州水戸某男年十六〕
15丁裏○説明文なし(男, 左耳殻)	「華岡家治験図鑑第一」の(42) 〔耳菌毒 丹州笹山農夫五郎大夫〕
16丁表 軟肉瘤 大和葛下郡木戸邑惣兵衛娘行年二十二(女, 右前腕)	「華岡家治験図鑑第一」の(51) 〔軟肉瘤 大和葛下郡木戸邑惣兵衛女年二十二〕
16丁裏 六指(性別不詳, 右手拇指)	「華岡家治験図鑑第一」肝の(52) 〔六指 俗ニ云、蟹娘・蟹狀 紀州伊都郡背野山邑漁夫爲八女〕
17丁表 血瘤 淡州之人(男女不詳, 左下腿)	「華岡家治験図鑑第一」の(68) 〔血瘤 淡州〕
17丁裏 脱疽 大谷新在家万次郎(右拇趾部)	「華岡家治験図鑑第一」の(64) 〔紀州伊都郡大谷万次郎〕
18丁表 同二(健康部の境界で節断した図)	「華岡家治験図鑑第一」の(65)
18丁裏 骨瘤 平村孫八(右下腿)	「華岡家治験図鑑第一」の(66) 〔骨瘤 紀州伊都郡平邑孫八郎〕
19丁表○陰瘡 和州之姜女(左鼠径部)	「華岡家治験図鑑第一」の(70) 〔陰瘡 和州〕
19丁裏○陰瘡 大和下市(左鼠径部)	「華岡家治験図鑑第一」の(71) 〔和州吉野下市〕
20丁表○俗云マヘタレ 浪華奈良茶屋下婢	「華岡家治験図鑑第一」の(72) 〔俗云、前垂玉門。浪花難波新地奈良茶屋女。今嫁。天満。〕
20丁裏○泉州熊取(女, 子宮脱)	「華岡家治験図鑑第一」の(75) 〔子宮脱 泉州熊取〕
21丁表○摂津兵庫	「華岡家治験図鑑第一」の(73) 〔陰痔 摂津兵庫〕
21丁裏○陰瘻 江戸新町三玉丁之女	「華岡家治験図鑑第一」の(74) 〔陰瘻 江戸深川〕
22丁表○鎖陰 野上邑弥右エ門娘行年十七	「華岡家治験図鑑第一」の(78) 〔鎖陰 紀州野上邑弥右衛門女雪野年十七〕
22丁裏○陰瘡 泉州田中村彦兵衛妻行年五十三	「華岡家治験図鑑第一」の(77) 〔陰瘡 不、見。月経。泉州和泉郡田中村彦兵衛妻年五十三〕
23丁表 陰門翻花 紀州岩手	「華岡家治験図鑑第一」の(37) 〔玉門翻花 紀州岩手駅山本女〕
23丁裏(包茎?)	「華岡家治験図鑑第一」の(39) 〔に該当か?〕
24丁表○説明文なし(男, 脱肛)	「春林軒奇患図下」25丁表* 〔肛門反花〕
24丁裏○会陰打撲 河内之人	「春林軒奇患図下」25丁裏* 〔阿菟之人会陰打撲〕
25丁表 大疝斗 熊野玉置山源兵衛	「華岡家治験図鑑第一」の(80) 〔大疝斗 紀州玉置山源兵衛〕
25丁裏 同症 肥前平戸万五郎	「華岡家治験図鑑第一」の(81) 〔大疝斗 肥前平戸万五郎〕
26丁表 同症 阿州美馬郡山吹村万次郎行年四十三	「華岡家治験図鑑第一」の(82) 〔大疝斗 阿州美馬郡山吹邑次郎年四十三〕
26丁裏 其二(陰莖部切開の図)	「華岡家治験図鑑第一」の(82)
27丁表 其三(陰囊前部切除の図)	「華岡家治験図鑑第一」の(82)

- 27 丁裏 其四 (縫合後の図) 「華岡家治験図鑑第一」の(82)
- 28 丁表 (男, 左手第4指部の腫瘍) 「華岡家治験図鑑第二」の(17)
- 28 丁裏 反花 吉野家半兵衛 浪華心斎橋筋順慶町角 「華岡家治験図鑑第二」の(16) 「浪華心斎橋筋順慶町角吉野屋半平衛反花」
- 29 丁表 (同) 全形 (右側面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(16)
- 29 丁裏 説明文なし (男, 左中指の腫瘍) 「華岡家治験図鑑第一」の(48) 「手指 肥前高来郡謙早 (左中指)」
- 30 丁表 肉瘤 備前水門大工 (男, 左胸部) 「華岡家治験図鑑第一」の(60) 「肉瘤」(呉が290頁に示す「備前邑上郡邑久郷匠夫松三郎」)
- 30 丁裏 其二 全形 (切除腫瘍塊, 右半分) 「華岡家治験図鑑第一」の(60)
- 31 丁表 其二 全形 (切除腫瘍塊, 左半分) 「華岡家治験図鑑第一」の(60)
- 31 丁裏 両陰 田井村小芳 題名欠 (修琴堂文庫本) ** 「両陰 紀州大井邑喜右エ門娘歳十七全治録嫁」
- 32 丁表 肉瘤 河内龍泉寺村 塊量一貫二百日 「華岡家治験図鑑第二」の(16) 「河内龍泉寺村庄藏娘 肉瘤」
- 32 丁裏 同 全形 (切除腫瘍塊の右半分) 「華岡家治験図鑑第二」の(16) 「目量一貫二百錢 周囲四尺二尺二寸」
- 33 丁表 乳岩 藍屋利兵衛母行年六十 和州宇智郡五條駅 「華岡家治験図鑑第二」の(1) 「乳岩 和州宇智郡五條駅 藍屋利兵衛母歳六十」
- 33 丁裏 説明文なし (上はメス, 下は缺の図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 34 丁表 其二 (乳房に切開を加えた図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 34 丁裏 其三 (切開口に左手を入れていた図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 35 丁表 其四 (右手にメスを持ち, 腫瘍を切除している図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 35 丁裏 其五 (両手で腫瘍塊を取り出す図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 36 丁表 其六 (腫瘍塊の上面, 下面の図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 36 丁裏 其七 縦断面中 (切除腫瘍塊の縦断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(1)
- 37 丁表 紀伊橋本駅 鍛冶甚兵衛妻行年三十五 (切除腫瘍とその縦断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(2) 「紀州橋本駅 鍛冶甚兵衛妻行年三十五」
- 37 丁裏 紀伊伊都郡麻生津西脇 彦兵衛妻行年五十五 (乳房の切開図) 「華岡家治験図鑑第二」の(3) 「紀州伊都郡麻生津西脇 彦兵衛妻五十五歳」
- 38 丁表 其二 割開中筋絡纏 (切除腫瘍塊の全形と縦断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(3) 「腫瘍全形」
- 38 丁裏 阿波板野郡撫養南浜 天野屋幸作母行年五十四 「華岡家治験図鑑第二」の(4) 「阿波板野郡撫養南浜 天野屋幸作母年五十有十四」
- 39 丁表 其二 全形 (腫瘍塊の全形と縦断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(4) 欠
- 39 丁裏 河内三日市勘助妻 核量五十錢 (腫瘍塊と縦断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(5) 「河内三日市勘助妻 核量五十錢」
- 40 丁表 紀伊橋本駅三河屋治兵衛母行年六十 (乳房切開図) 「華岡家治験図鑑第二」の(6) 「紀伊橋本駅三河屋治兵衛母行年六十」
- 40 丁裏 其二 全形 横断 (腫瘍の全形と横断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(6)
- 41 丁表 阿波徳島沖之洲水主平七母行年五十六 (乳房の切開図) 「華岡家治験図鑑第二」の(8)
- 41 丁裏 一塊横断 (腫瘍の全形と横断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(8)
- 42 丁表 江左八幡扇子屋源太郎姪 全形量三十錢 横断 「華岡家治験図鑑第二」の(9) 「江州八幡扇子屋源太郎姪 核量三十錢」
- 42 丁裏 備前東片岡村紋次郎女房 全形 兩百錢 「華岡家治験図鑑第二」の(10) 「備前東之岡村紋次郎内室 核量百錢」
- 43 丁表 紀伊有田須原佐五右エ門母行年六十四 横断 (腫瘍の全形と横断面図) 「華岡家治験図鑑第二」の(11) 「紀州有田須原佐五右衛門母六十四歳」
- 43 丁裏 紀伊名草郡大川浦傳兵衛母行年五十五 (腫瘍塊の図) 「華岡家治験図鑑第二」の(12) 「紀州名草郡大川浦傳兵衛母年五十有五」
- 44 丁表 和羽芳野郡木津川新八娘行年十有七 全形 量二百錢 (腫瘍塊の図) 「華岡家治験図鑑第二」の(13) 「和州芳野郡木津川新八娘行年十又七歳」
- 44 丁裏 飛騨之国高山広瀬利兵衛妻 塊量三百七十錢 (腫瘍塊の図) 「華岡家治験図鑑第二」の(14) 「飛騨国高山広瀬利兵衛妻 塊三百七十錢」
- 45 丁表 1行~47 丁表 3行 「乳岩図譜」の冒頭 #
(題名はないが、「友人華岡師之爲醫也」で始まる崖 熊野の序 (跋) 文)
- 47 丁表 4行~51 丁表 3行 「乳岩図譜」の末尾 ##
(題名はないが、「飛州高山広瀬利兵衛」で始まる野村 鄂の「記青洲先生療乳岩」の文章)。文末に「文化庚午夏六月七日 塾生 備後 野村 鄂記」)
- 51 丁表 4行~51 丁裏 9行 「乳岩図譜」の崖の文章の後 ###
(題名はないが、「乳岩不治誰昔然矣」で始まる赤石希范の文章)。文末に「文化六巳五月晦日 備前 赤石希范 識」)

注:「瘍科図鑑」の丁数の後の○は、図が円の中に描かれているものである。

*: 北里大学東洋医学研究所・医史研究室所蔵

** : 北里大学東洋医学研究所図書館寄託本

: 呉の「華岡青洲先生及其外科。東京:吐鳳堂書店;1923. p.54-56

: 呉の「華岡青洲先生及其外科。東京:吐鳳堂書店;1923. p.270-272

: 呉の「華岡青洲先生及其外科。東京:吐鳳堂書店;1923. p.64

での男性器, 女性器疾患を画いた12図は円の中に描かれている。円の中に画を描くという発想は素人には容易に思いつかない。あるいは青洲の肖像画を画いて春林軒とも縁があった丹波長續(素後)²⁷⁾が始めたとも推測されるが, 現在のところ丹波長續が描いた図譜の存在は知られていない。

いずれにせよ, この「瘍科図鑑」は円の中に画を画いた図譜の系統に属する一本であることは間違いない。

以上述べたように「瘍科図鑑」は「華岡家治験図巻第二」の系統に属する図譜であり, 後述するように1825年夏以降に成立したもので, 1810年

頃から始まった図譜の歴史から見れば「中期」に属する図譜である。華岡流外科の手術図譜は最初の赤石希范による乳癌手術のみの図を収めた「乳岩図譜」から発展して後に乳癌以外の各種疾患の手術図も収めるようになるが、「瘍科図鑑」はその過渡期の姿を伝えている点で重要である。いわゆる奇患図類の中で、その模写本が海外の博物館に収められ常時公開・展示されているのは「瘍科図鑑」のみである。この意味でこの図鑑は北米における青洲の業績の普及、顕彰に大いに貢献している。

4. 「瘍科図鑑」に披見される 崖 剛先, 赤石希范, 野村 鄂の文章

「瘍科図鑑」の系統を明らかにするもう一つの手掛りは、45丁表から51丁裏に記された漢文の文章である。51丁表3行に「文化庚午夏六月七日 塾生 備後 野村 鄂記」とあるので、冒頭の45丁表から51丁表2行までの文章は野村の文であるかのように思われるが、そうではなくして、野村の文は47丁表4行から始まる。具体的に記すと次のようになる。

45丁表1行～47丁表3行

「友人華岡師之爲～刻其何止乎」

……崖 剛先の文章

47丁表4行～51丁表3行

「飛州高山広瀬～附于図以贈云」

……野村 鄂の文章

51丁表4行～51丁裏9行

「乳岩不治誰昔～豈足盡乳岩乎」

……赤石希范の文章

上記は複雑であるので以下に解説する。「はじめに」において述べたように、春林軒の門人赤石希范が1809年5月に作った「乳岩図譜」の序文が赤石の文章である⁶⁾。しかし、出版は見送られ、赤石はこれを残念に思って青洲の友人紀州藩の儒者崖 剛先に草稿の閲を乞うた。崖は出版されないのを残念に思い「跋」を書いて赤石に贈った。これが崖 剛先の文章である。したがって崖と赤

石の文章は密接に関連している。一方、野村の文章は1810年(文化7)5月11日に乳癌手術を行った飛州高山・廣瀬屋利兵衛の妻の症例記録である。手術に関わったと思われる野村 鄂は家族から請われて詳細な記録を作った。恐らく野村の手になる稿本と思われる独立した一冊子が残されている¹⁴⁾。なお、この症例は呉の著に示された「乳巖姓名録」には「文化十癸酉年九月既望 飛州高山 廣瀬屋利兵衛妻」とあるが、「乳巖姓名録」の記録者が記入することを失念し、後で追記したものであろう²⁸⁾。したがって野村の文章は崖と赤石の文章とは直接的に関連したものではない。これらの三つの文は呉の著書に区々に収載されているが、互いの関連について言及がないので読者はそれらの意義を理解できないであろう²⁹⁾。

呉の引用する「乳岩図譜」には冒頭に崖の序(跋)、赤石の序(跋)、手術の図があって最後に野村の文章が記るされているという³⁰⁾。収載されている手術図は乳癌手術に限定されており、わずかに13症例である。この図譜は現在所在不明で、今直ちにこれを特定することは困難である。しかし、「瘍科図鑑」では乳癌以外の様々な疾患の手術図が見られるので「乳岩図譜」⁶⁾とは大きな違いがある。崖、赤石、野村の文章があって、なおかつ乳癌以外の各種疾患の手術図を収載した図譜は極めて少ない。本間玄調が監修した「春林軒二十一種」の十四集、十五集は所謂「奇患図」である³¹⁾。十四集には崖、赤石、野村の文章が続けて収載されているが、続く図は脱臼、整復の図、さらに乳癌手術の図で、これは「華岡家治験図巻第一」と「華岡家治験図巻第四」に相当する。したがって「瘍科図鑑」と同系統の図譜ではない。十五集には各種の手術図が掲載されており、「華岡家治験図巻第一」の系統の図譜である。杏雨書屋の所蔵する「奇患図」は崖の文章+「華岡家治験図巻第四」+「華岡家治験図巻第一」(一部は円の中に描かれている)+赤石の文章+野村の文章の構成になっている^{32,33)}。これも全体として見れば「春林軒二十一種」の十四集、十五集に近似する。しかし、「華岡家治験図巻第四」を含むので、「瘍科図鑑」の系統ではない。

表2 「瘍科図鑑」と「華岡家奇患図」の比較

「瘍科図鑑」の説明文の（ ）は松木による注

「瘍科図鑑」の説明文	「華岡家奇患図」*における類似図
1 丁表 江都之人 (男, 左頬部の腫瘍)	23 丁表
1 丁裏 浪華島之内妓 肉瘤 (女, 右頬部)	23 丁裏
2 丁表 田邊中町女 ^{十九歳} 肉瘤 (左頬部)	28 丁表
2 丁裏 肉瘤 <small>塊量三十三錢</small> (女, 左頬)	31 丁表
3 丁表 肉瘤 泉州堺沈香屋主人 (男, 左頬部)	25 丁表
3 丁裏 血瘤 勢州山田之人 (男, 前額鼻部)	25 丁裏, <small>ただし左右反転, 姿勢が異なる</small>
4 丁表 肉瘤 有田之農夫 (男, 左鎖骨下)	27 丁表
4 丁裏 血瘤 紀州日高之人 <small>若山清高之兄也</small> (男, 左臍傍)	欠
5 丁表 血瘤 (男, 右大腿内側部)	欠
5 丁裏 粉瘤 湯浅伊兵衛 (男, 前頸部)	30 丁表
6 丁表 血痣翻花 江戸小間屋忠兵衛妻 (右背腰部)	38 丁表
6 丁裏 其二 全形 (摘出標本)	38 丁裏, <small>ただし腫瘍塊は2個描かれている</small>
7 丁表 火傷 高野山之僧 (男, 左膝窩部)	28 丁裏, <small>高野山之僧火傷</small>
7 丁裏 火傷 日高之人 (男, 左上腕と胸壁の癒着) (正面図)	26 丁表
8 丁表 其二 截断 (左側面図)	26 丁裏, <small>ただし左右反転し, 上半身裸</small>
8 丁裏 患耳瘤 和州下市 某之小兒 (右耳)	欠
9 丁表 虫胞 頭皮肉間生於白虫 (男)	39 丁表
9 丁裏 肩風 備前之人 (男, 左肩甲部)	24 丁表
10 丁表○走馬疔 荒川之子 (男, 唇周辺部)	欠
10 丁裏○肉瘤 勢州朝熊永正寺 (男, 左頬部)	欠
11 丁表○口痔 若州小浜之人 (男, 左口腔)	欠
11 丁裏○粉河之人 (口唇の異常) (男)	欠
12 丁表○血痣 大和高市郡樹馬又七 ^{行年二十七} (男, 下口唇)	欠
12 丁裏○舌疔 若山之老婦 (女, 下口唇)	欠
13 丁表○骨瘤 京都東洞院吳服屋新兵衛 ^{行年二十二} (男, 左下顎部)	欠
13 丁裏○其二 (患部の切開図)	欠
14 丁表○眼胞菌毒 備後尾道之人 (男, 左眼)	欠
14 丁裏○同前 阿州徳府 (男, 左下眼瞼)	欠
15 丁表○骨瘤 常州水戸樹内某倅 ^{行年十六} (男, 左頬部)	欠
15 丁裏○説明文なし (男, 左耳殻)	欠
16 丁表 軟肉瘤 大和葛下郡木戸邑惣兵衛娘 ^{行年二十二} (女, 右前腕)	欠
16 丁裏 六指 (性別不詳, 右手拇指)	欠
17 丁表 血瘤 淡州之人 (男女不詳, 左下腿)	29 丁裏, <small>ただし血の流れは3筋</small>
17 丁裏 脱疽 大谷新在家万次郎 (右拇趾部)	欠
18 丁表 同二 (健疾部の境界で節断した図)	欠
18 丁裏 骨瘤 平村孫八 (右下腿)	欠
19 丁表○陰瘤 和州之姜女 (左鼠径部)	欠
19 丁裏○陰瘤 大和下市 (左鼠径部)	33 丁裏
20 丁表○俗云マヘタレ 浪華奈良茶屋下婢	32 丁裏
20 丁裏○泉州熊取 (女, 子宮脱)	35 丁裏
21 丁表○摂州兵庫	36 丁裏
21 丁裏○陰瘻 江戸新町三玉丁之女	35 丁表
22 丁表○鎖陰 野上邑弥右エ門娘 ^{行年十七}	欠
22 丁裏○陰瘤 泉州田中村彦兵衛妻 ^{行年五十三}	37 丁表
23 丁表 陰門翻花 紀州岩手	37 丁裏
23 丁裏 説明文なし (大仙斗)	欠
24 丁表○説明文なし (男, 脱肛)	欠
24 丁裏○会陰打撲 河内之人	41 丁裏
25 丁表 大斗疔 熊野玉置山源兵衛	40 丁裏, 41 丁表
25 丁裏 同症 肥前平戸万五郎	欠
26 丁表 同症 阿州美馬郡山吹村万次郎 ^{行年四十三}	欠
26 丁裏 其二 (陰茎部切開の図)	欠
27 丁表 其三 (陰囊前部切除の図)	欠
27 丁裏 其四 (縫合後の図)	欠
28 丁表 (男, 左手第4指部の腫瘍)	欠
28 丁裏 反花 吉野家半兵衛 浪華心齋橋筋順慶町角	欠
29 丁表 (同) 全形 (右側面図)	欠

29 丁裏	説明文なし(男, 左中指の腫瘍)	欠
30 丁表	肉瘤 備前水門大工(男, 左胸部)	欠
30 丁裏	其二 全形(切除腫瘍塊, 右半分)	欠
31 丁表	其二 全形(切除腫瘍塊, 左半分)	欠
31 丁裏	両陰 田井村小芳	欠
32 丁表	肉瘤 河内龍泉寺村 塊量一貫二百目	欠
32 丁裏	同 全形(切除腫瘍塊の右半分)	欠
33 丁表	乳瘤 藍屋利兵衛母 ^{行年六十} 和州宇智郡五條駅	5 丁表
33 丁裏	説明文なし(上はメス, 下は鉄の図)	5 丁表
34 丁表	其二(乳房に切開を加えた図)	6 丁表, <small>ただし切開前の図</small>
34 丁裏	其三(切開口に左手を入れている図)	6 丁裏
35 丁表	其四(右手にメスを持ち, 腫瘍を切除している図)	7 丁表
35 丁裏	其五(両手で腫瘍塊を取り出す図)	7 丁裏
36 丁表	其六(腫瘍塊の上面, 下面の図)	9 丁 <small>和州宗智郡五條益藍屋利兵衛母歳六十</small>
36 丁裏	其七 縦断見中(切除腫瘍塊の縦断図)	8 丁表
37 丁表	紀伊橋本駅 鍛冶屋甚兵衛妻 ^{行年三十五} (切除腫瘍とその縦断図)	欠
37 丁裏	紀伊伊都郡麻生津西脇 彦兵衛妻 ^{行年五十五} (乳房の切開図)	欠
38 丁表	其二全形 割開中筋絡纏(切除腫瘍塊の全形と縦断図)	8 丁裏, <small>本国伊都郡麻生津郷西之郎脇師彦平衛妻歳五十七</small>
38 丁裏	阿笈板野郡撫養南浜 天野屋幸作母 ^{行年五十四}	10 丁表, <small>阿州板野郡撫養南浜天野屋幸作母歳五十四</small>
39 丁表	其二全形(腫瘍塊の全形と縦断図)	10 丁裏
39 丁裏	河内三日市勘助妻 核量五十錢(腫瘍塊と縦断図)	欠
40 丁表	紀伊橋本駅三河屋治兵衛母 ^{行年六十} (乳房切開図)	欠, <small>再発時の図は11丁表にある</small>
40 丁裏	其二 全形 横断(腫瘍の全形と横断図)	欠
41 丁表	阿笈徳島沖之洲水主平七母 ^{行年五十六} (乳房の切開図)	欠
41 丁裏	一塊横断(腫瘍の全形と横断図)	11 丁裏, <small>阿州徳島沖之洲水主平七母歳五十有六</small>
42 丁表	江笈八幡扇子屋源太郎姪 全形 ^{量三十錢} 横断	欠
42 丁裏	備前東片岡村紋次郎女房 全形 ^{兩百錢}	欠
43 丁表	紀伊有田須原佐五右エ門母 ^{行年六十四}	14 丁裏
	横断(腫瘍の全形と横断図)	15 丁表, <small>乳房に切開創が入った図</small>
43 丁裏	紀伊名草郡大川浦傳兵衛母 ^{行年五十五}	15 丁裏, <small>本国名草郡大川浦傳兵衛母歳五十五</small>
	(腫瘍塊の図)	16 丁表
44 丁表	和笈芳野郡木津川新八娘 ^{行年十有七}	欠
	全形 ^{量二百錢} (腫瘍塊の図)	
44 丁裏	飛騨之國高山広瀬利兵衛妻 塊量三百七十錢(腫瘍塊の図)	16 丁裏, <small>飛州高山広瀬利兵衛妻歳五十有二重三百七十錢</small>
45 丁表 1行~47 丁表 3行	(題名はないが, 「友人華岡師之爲醫也」で始まる崖 熊野の序(跋)文)	1 丁表~4 丁表
47 丁表 4行~51 丁表 3行	(題名はないが, 「飛州高山広瀬利兵衛」で始まる野村 鄂の「記青洲先生療乳瘤」の文章). 文末に「文化庚午夏六月七日 塾生 備後 野村 鄂記」	17 丁表~22 丁裏
51 丁表 4行~51 丁裏 9行	(題名はないが, 「乳岩不治誰昔然矣」で始まる赤石希范の文章). 文末に「文化六巳五月晦日 備前 赤石希范 識」	44 丁表~45 丁表

管見では、崖、赤石、野村の3文章を含み、且つ「華岡家治験図鑑第一」を中心とする図を収載している図譜は既述した東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵する「華岡家奇患図」のみである³⁴⁾。43 丁表の識語によれば、春林軒で画家の端月が描いた図を江戸虎ノ門の「確 齋清」が模写したものに赤石の文章を付け加えた図譜である。つまり、この図譜の構成は崖の文章+藍屋 勘→廣瀬屋利兵衛妻までの10症例の乳癌手術+野村 鄂の文章+「華岡家治験図巻第一」に見られる図+

赤石の文である。半丁に描かれた図を1図(図が一丁に互って描かれている場合、一丁で一図とした)とすると、合計61図描かれている。「瘍科図鑑」と「華岡家奇患図」を比較したのが表2である。「瘍科図鑑」の図で「華岡家奇患図」に欠くものがある一方で、逆に「華岡家奇患図」にあって「瘍科図鑑」に欠く図もある。このことを考慮すると両者はどちらかが他方を模写したという直接的関係ではなくして、それぞれ呉の云う「乳岩図譜」や「華岡家治験図巻第二」を模写して、そ

れに他の図や文章が後から付加されてそれぞれが完成したものと考えた方が妥当であろう。

5. 「瘍科図鑑」の成立年代について

「瘍科図鑑」に描かれた乳癌手術の図と「乳嶺姓名録」（「乳巖姓名録」）³⁵⁾を突き合わせることで、44丁表に描かれた「和州吉野郡木津川新八娘」の乳癌手術が「文政七年（1824）九月十七日」に行われて最も新しいことが分かる。したがって、この手術を画いた「瘍科図鑑」はこの期日以降に成立したことになる。乳癌以外の手術図に記された説明文に本図鑑の成立年を示唆する表記は披見されない。これらと比較参照すべき乳癌手術以外の年紀を記した手術記録が殆ど遺されていないからである。

しかし、一つだけ手掛りを与えてくれる図がある。「瘍科図鑑」の2丁裏に描かれた「肉瘤」の図（図3）である。図には「肉瘤 塊量三十三錢」とだけあって年月日の記述はない。この図は「華岡家治験図鑑第一」の6番目の症例で、呉は「肉瘤



図3 同2丁裏の「肉瘤」の図
（順天堂大学日本医学教育歴史館所蔵）

豫洲宇和島人 核量三十三錢³⁶⁾と記している。この症例は「南紀徳川史卷之百六十一」³⁷⁾によって図4に示したように図3と同じ症例であることが明らかである。これら両図と同じ構図の画が上述した狩野文庫本の「華岡家奇患図」³⁴⁾に認められる（図5）。着物の模様、左右の手の位置など細かい点で異なる点はあるが、全体の構図、患部の位置、さらには切除腫瘍の重さが「三十三錢」と一致しているので、これらの3図は同じ症例を画いたものであることは間違いない。図5の説明文には「文政八_{乙酉}夏 十四日切断 同二十八日而愈 豫洲宇和島之人也 四国路也 肉重三十三錢」とあることによって手術は1825年夏（4～6月）に行われたことが明らかになった。このことから「瘍科図鑑」は最も早くても1825年夏以降に成立したことが明らかである。これは山崎が主張する成立年代の1810年とは大きくかけ離れている。

おわりに

医史学研究者であった山崎 佐旧蔵の「紀州華岡家瘍科図鑑」は阿部六陽画伯の手によって2本模写されて、その内の1本はシカゴにある International Museum of Surgical Science の Japan Hall of Fame に



図4 「肉瘤」の図
（「南紀徳川史 卷之百六十一」, p.187）



図5 「肉瘤」の図
(東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の「華岡家奇患図」, 31丁表)

展示され、北米における華岡青洲の業績の普及に大きな貢献をなしている。しかし、これまでの研究では原図鑑の詳細は全く知られておらず、その成立年代も1809年、1810年、または1823年と誤って伝えられていた。今回、他の図譜と比較することによって、その内容は呉の云う「乳岩図譜」、つまり赤石の「乳岩図譜」の系統を引くもので、その成立は早くても1825年夏を遡るものではないことが判明した。模写本がJapan Hall of Fameに展示されるに至った経緯についても明らかにした。

本稿を草するに際して種々有益な情報を戴いた順天堂大学医史学研究室、玉堂美術館、International Museum of Surgical ScienceのMichelle Rinard部長、Wood Library-Museumの故Patrick Sim氏に感謝の意を表す。

参考文献および注

- 1) Matsuki A. Seishu Hanaoka in The Medical History of Japan. Seishu Hanaoka and His Medicine—A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery—. (Second ed.) Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 1–11
- 2) 本間玄調. 続瘍科秘録. 大塚敬節, 矢数道明編.

近世漢方医学書集成 116. 本間棗軒(六). 東京: 名著出版; 1984

- 3) 鎌田玄台. 外科起癢図譜. 1840 以下の覆刻版がある.
土手健太郎. 外科起癢図譜~平成復刻版~. 東温: 土手健太郎; 2014
- 4) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前: 松木明知; 2002. 巻頭のカラー写真
- 5) 松木明知. 「乳巖治験録」中の4枚の手術図に関する一考察. 日本医史学雑誌 2016; 62(3): 295–304
- 6) 松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016; 62(3): 305–314
- 7) 山崎 佐. 日本疫史及防疫. 東京: 克誠堂書店; 1931
- 8) 以前は単にHall of Fameと呼ばれていた.
- 9) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923
- 10) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 388–411
- 11) 関場不二彦. 西医学東漸史話(下巻). 東京: 吐鳳堂書店; 1933. p. 245–247
- 12) 堀内 信編. 南紀徳川史(巻之百六十一). 和歌山: 南紀徳川史刊行会; 1933. p. 179–242
- 13) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 138
- 14) 松木明知. 廣瀬屋利兵衛の妻の乳癌手術. 華岡青洲と「乳巖治験録」. 弘前: 松木明知; 2004. p. 67–92
以上の論考に引き続いて野村 鄂の「青洲先生療乳巖図記」がカラーで覆刻されている.
- 15) 松木明知. 奇患図の研究. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. p. 171–249
- 16) 医聖華岡青洲展実行委員会編. 医聖華岡青洲展. 和歌山: 医聖華岡青洲展実行委員会; 1992. p. 37
- 17) 和歌山市立博物館編. 特別展「華岡青洲の医塾春林軒と合水堂」和歌山: 和歌山市教育委員会; 2012. p. 38
- 18) 長田 功. 校注「乳癌奇病図」. 東京: 校注「乳癌奇病図」刊行会; 2014
- 19) 塩田広重. 序. 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964
- 20) 総合美術研究所編. 新潟県六日町所蔵作品目録. 六日町: 新潟県六日町; 1994. 巻末の「作家略歴」中「阿部六陽」の項目がある(頁数の記述なし)
<https://www.nagaragawagarou.com/visualmuseum/m-rokuyou.html>にも簡単な略歴が記されている.
- 21) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 176
- 22) 順天堂大学図書館編. 山崎文庫目録. 東京: 順天堂大学図書館; 1969. p. 229
- 23) 中山恒明, 菊地真一郎. 国際外科学会のHall of

- Fameの日本室について. 日本医事新報グラフ 1959; (1822): 11-14
- 24) 題名を欠く. 北里大学東洋医学研究所図書館へ寄託された. 修琴堂文庫本 請求記号シ-112-1
- 25) 松木明知. 奇患図の研究. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. p. 198-199
- 26) 「華岡青洲先生春林軒門人録」(文献8のp.461)の「武蔵」の部に「文政一一年二月一七日 東都 守矢子行」とある.
- 27) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 170, 177
- 28) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 278
- 29) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 54-56 (崖の文), p. 64 (赤石の文), p. 270-272 (野村の文)
- 30) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 401
華岡家七代雄太郎の弟陽之介の娘中島紀子氏は「乳岩図譜華岡家」を所蔵されておられるが, 1849年に澤井宗順が書写した図譜で, 乳癌の手術図を画き, 末尾に赤石の文を収載して, 崖の文章, 野村の文章を欠くので, 呉のいう「乳岩図譜」とは異なる.
- 31) 春林軒二十一種. 十四集, 十五集. 1850. 公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏 3169-21
- 32) 奇患図. 公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏 4881
- 33) 松木明知. 奇患図の研究. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. p. 190-191
- 34) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵. 請求番号 22283-1
- 35) 松木明知. 「乳岩姓名録」によって判明した春林軒の乳癌手術に関する新発見. 日本医史学雑誌 2017; 63(4): 371-388
「乳岩姓名録」と「乳巖姓名録」の両史料でこの症例の手術日は一致している.
- 36) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 389
- 37) 堀内 信編. 南紀徳川史(巻之百六十一). 和歌山: 南紀徳川史刊行会; 1933. p. 187

A Bibliographical Study on *Yokazukan*, Which Formerly Belonged to the Tasuku Yamazaki Collection

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Yokazukan is an illustrated book of rare surgical diseases that were treated at Seishu Hanaoka's Shunrinken. The book, which once belonged to medical historian Tasuku Yamazaki, contains eighty-eight color illustrations, Chinese prefaces by Yuya Kishi and Kihan Akaishi, and a case report, also in Chinese, of a breast cancer operation by Gaku Nomura. The origin of the book can be traced to Akaishi's 1809 book *Nyuganzuhu*, which includes 13 drawings of breast cancer surgery. *Yokazukan* includes eight of *Nyuganzuhu*'s thirteen breast cancer surgery illustrations, both prefaces, and Nomura's case report. It has many new illustrations as well. Yamazaki said that *Yokazukan* was completed in 1810; however, according to my examination of another illustration book, the excision of a woman's left cheek tumor, depicted on page 4 in *Yokazukan*, was performed in the summer of 1825. *Yokazukan*, therefore, had to have been completed after this date. Artist Rokuyo Abe painted two copies of *Yokazukan*, one of which was donated in 1956 to the Japanese Hall of Fame, International Museum of Surgical Science, Chicago, Illinois. The elegant reproduction has been serving to increase awareness in the Western world of Hanaoka's achievements. The background of the donation is also discussed.

Key words: Tasuku Yamazaki, Hanaoka-style surgery, *Yokazukan*, Kihan Akaishi, Japan Hall of Fame